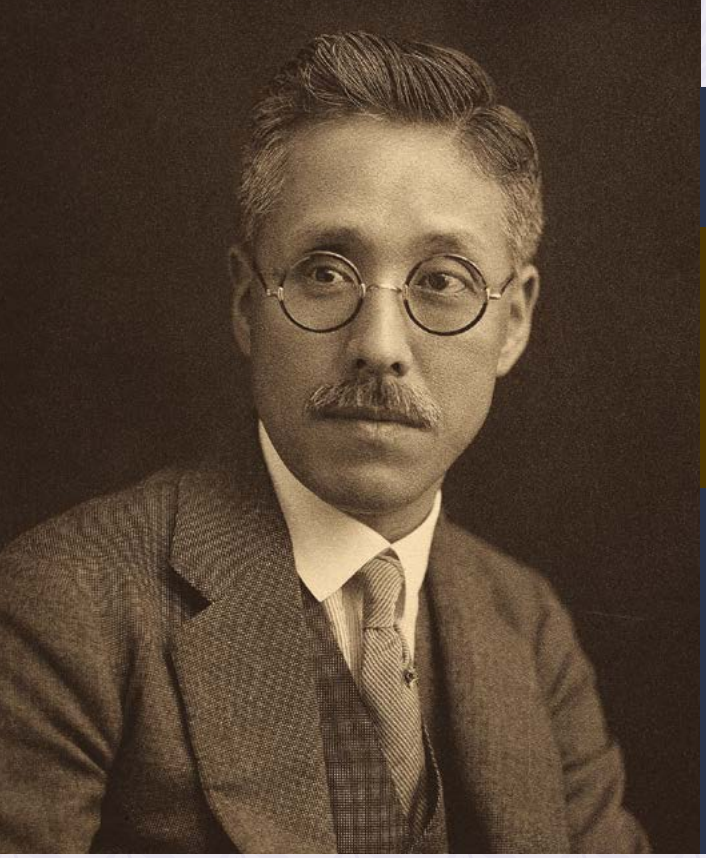

歴史散歩 ～新春特集～

川喜田 半泥子

kawakita handeishi (1878～1963)

商家の長男に生まれ、実業家として地域経済界の要職を務める傍ら、陶芸家として、あるいは趣味人として、書・絵画・工芸・写真などのさまざまな芸術分野にその足跡を残した川喜田半泥子。多忙な日々の中で、その芸術世界に「しゃれ」や「遊び心」を忘れなかった彼の生涯をたどります。

明治11(1878)年、川喜田半泥子は川喜田久太夫家15代政豊の長男として生まれました。本名は川喜田久太夫政令(まさのり)、幼名を善太郎といいます。川喜田家は寛永年間(1624～1644年)に創業した木綿問屋で、伊勢国に本拠を置き、江戸大伝馬町に江戸店を持つ豪商でした。

しかし、幼いころの半泥子は幸せとばかりはいえませんでした。祖父・父を相次いで亡くし、1歳で家督を相続、母とも別れた半泥子は祖母政から教育を受けて育ちます。政の勧めもあり、幼少期より禅道に入って学び、それが後の彼の人生に大きな影響を与えたようです。

25歳で百五銀行取締役に就任した半泥子は、その後も百五銀行頭取ほか数々の企業の要職をこなし、また津市議会議員、三重県議会議員として、経済・政治など幅広い分野で活躍しました。

多忙な日々の中で、青年時代より芸術に関心を寄せていた半泥子は、茶道、油彩画、日本画、俳句と、その多芸ぶりを発揮していきます。

陶芸家として広く知られる半泥子は、子どものころから焼き物が好きだったようですが、本格的に始めたのは還暦近くになってからといわれます。昭和初期には、自宅のある千歳山に初めて小さな登り窯を築いて、若き陶工らと交流し、研究と修練を重ねていきました。戦後は長谷山中腹にある広永に窯を移して会社組織とし、弟子たちと共に作陶を楽しんだようです。

半泥子という号は「半ば泥(なず)みて半ば泥(なず)まず」という意味があり、すべてに熱中する半泥子のことだから、家をつぶしてはならない、すべて半ば泥むがよかろうと、禅の師が命名したといわれます。師の教えは、その人間性にも反映され、生み出された作品には他のものにはまねできない、絶妙なバランスと間がありました。

このような創作活動のほか、半泥子が力を尽くしたことに、地域文化の振興があります。昭和5(1930)年には財団法人石水会館(現在の公益財団法人石水博物館)を設立し、さまざまな事業を手掛け、教員の海外視察派遣や小児健康相談などの教育・福祉事業をはじめ、ホール、テニスコートなどを市民に開放して、美術展、講演会、音楽会、映画会、演劇などの文化事業も行いました。

このように、幅広い分野で活躍した半泥子は、昭和38(1963)年10月26日、老衰のため84歳で亡くなりました。半泥子の残した作品は、独自の世界を構築し、今も人々を魅了し続けています。

写真提供(公財)石水博物館

問い合わせ　生涯学習課　☎229-3251　FAX229-3257